

日本ボストン会会報

発行者 日本ボストン会事務局

ボストンとの絆を強めたい

代表幹事 藤崎博也

日本ボストン会の皆様へ、新任の代表幹事としてご挨拶申し上げます。昨年9月の本会の幹事会で、次期の代表幹事の候補としての打診を受け、謹んでお引受けするとお答えしたわけですが、やむを得ない国際的な先約のために、10月25日の総会の折には海外出張中で出席することが出来ず、欠席のままご承認を頂くことになりました。ここにあらためて当日の欠席のお詫びと、皆様のご支持への御礼を申し上げます。

さて、私が今期の代表幹事を仰せつかったのは、MITとの関係からですので、この機会に、日本とMITとの関係、特に同窓会としての日本MIT会 についてご紹介し、併せて少々自己紹介をさせていただきたいと思っております。

MIT と日本との交流の歴史は極めて古く、MIT の前身のBoston Tech が創立されて10年後の1871年には、日本からの最初の留学生、本間英三郎氏が2年生として入学を許可され、3年後には土木の学士号を得ています。これは、アメリカ大陸以外からの留学生としては最初と記録されています。日本からの留学生で2番目に学位を取得したのが団琢磨氏で、後年、三井の理事長となり、経済界の重鎮として国際的にも活躍しましたが、同氏がMIT の創立50周年にあたる1911年に、日本のMIT 同窓生に呼びかけて設立したのが日本MIT 会の始まりです。

その後、団氏の暗殺、第2次大戦などがありましたが、会は有志によって引き継がれ、現在では、留学生だけではなく、客員教授や客員研究員として滞在した人々も希望により入会することができ、約2000人の会員を擁する大きな組織になっています。

また、1970年代からは、日本の企業による寄付講座が設けられるようになり、現在では、十指に余る寄付講座と産業学際会を通じての寄付が、MIT の教育と研究に少なからず貢献しております。

私とボストンとの最初のおつきあいは、東京大学の大学院学生であった頃に、フルブライト奨学金を受けて、1958年にMIT に留学したのがきっかけです。往路は氷川丸による船の旅でしたが、岡倉天心の助手としてボストン美術館に勤務され、のちに東洋美術部の部長をなさった富田幸二郎氏夫妻が同船しておられ、ボストンの歴史や文化、岡倉天心のことなど話してくださいました。このたび名古屋ボストン美術館の設立の計画を知り、ほとんど40年前の、富田氏との奇遇を懐かしく思い起こしております。

このときにはボストンに2年半ほど居りましたが、その間にヨーロッパでも研究する機会に恵まれました。音大を卒業して間もない頃の小沢征爾氏がタングルウッドに来られたのが1959年の夏、また、ジョン・F・ケネディが大統領に選ばれたのが、1960年の秋、いずれも私がボストン滞在中のことです。その後のボストンとのお付き合いもMIT が主ですが、合計20回以上訪れております。

最初の訪米から帰ってまもなく、日本MIT 会のお世話をすることになり、1982年から1990年まで、第8代の会長をつとめました。その間、1986年には会の創立75周年を記念する行事を催し、それまでの歴史をまとめた記念出版も行いました。後任の会長は、キャノンの御手洗肇さんに引き受けていただいたのですが、惜しくも1995年に亡くなられ、その後は神部信幸さんが会長をつとめておられます。

このようなわけで、ボストンは私にとって魂の故郷ともいえるほど、懐かしい青春の思い出に満ちた地です。このたび、ご縁あって本会のお手伝いをさせていただくことになり、明治のはじめから連綿と続いている日本とボストンとの絆を強めるのに、いささかでもお役に立てればと思っておりますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

(東京大学名誉教授・東京理科大学教授)

(1891-1980)

Henry Millerの水彩画 美術同好会

California Pebble Beachギャラリーを訪れたのは1994年5月1日。そこで「北回帰線」などで知られるアメリカの文豪、Henry Millerの作品(水彩画)に出会った。再び日本で彼の代表作品、百余点を目のあたりにし、数年のブランクがうその様に消え、あの時の感動がそのままによみがえってきた。「描くことは愛することだ。そして愛することは思う存分生きることだ。」と、語ったMiller。

Millerの描いた作品は、豊かな色彩と奔放な筆致で見ると悦びを与えてくれる。自ら愛した女性達、友達、憧れの町、そして文学作品のイメージを描いた作品の多くは平面的ではあるが、私達のまなざしに、紙面に流麗するメロディを感じさせる。

Millerの1946年の作品、楚々とした「ピエロのアントワヌ」(別掲)の顔は、紙面一杯に大きく描かれている。アウトラインは、子供が描く絵の様に単純であるが、色のひびきあいは、見る人の目に感動を与える。

バックの鮮やかな紫がかかった青、その色は深いCaliforniaの海の様であり、洋服の水玉模様のエメラルドグリーンは、岸辺に近い海の色の様である。又、ハイネックの襟の澄んだレモン色が、アクセントとなり全体を引き締めている。自由に思うがままに描かれた眉、目、そして少し開いた口元は、今にも私達に何か語りそうである。

「書くことは大変だが、描くことは私に悦びと幸福を与えてくれる。」と生前Millerは語っている。40歳から50歳にかけて、意欲的に描き続けた数々の作品は詩的であり、絵の世界を、いっそうひろかれた世界へ、と誘っている様に思われる。

2月20日(木)～25日(火)

大丸ミュージアム(東京)

展覧会情報

18世紀フランス絵画のきらめき、ルーブル美術館



ANTOINETTE THE CLOWN
1946

「いこいの場」

ボストン日本人会婦人部

約1年間の準備期間を経て、1992年の新年と共にボストン日本人会婦人部が発足しました。時を同じくして、1961年より日本食品店、吉野屋を経営されている古川義子女史のご好意により地下室を無償で提供して戴き、細々ながら「いこいの場」を始めました。

「いこいの場」は言葉の通り皆様が憩える場所として誰でも参加でき、日本の食べ物と話して楽しい一時を過ごしていただくのが主旨です。特に戦後すぐ米国に來られ日本に里帰りする機会の少ない方に集まって戴きたいとの思いからです。

「いこいの場」も満5年を過ぎ多くの理解者、協力者を得て活動も大きくなり、場所も地下室から吉野屋の奥のホールに移り、参加者名簿も150名を越えました。

「いこいの場」第一土曜日月例パーティーでは幕の内弁当での昼食の後、いろいろの催し物があり、毎回40名位の方が参加されます。

昨年は1、2月は雪のため休みましたが、3月は総領事公邸での雛祭り、お茶会(4月)、くるみ絵の鯉のぼり作りで5月の節句、ハーバード大学植物園でのお花見(6月)、盆踊り(8月)、藤堂誠一郎氏による常磐津演奏(9月)、シイテウワ海岸での一泊旅行(10月)、ダンス(11月)、クリスマスパーティー(12月)でした。その他水曜サロン、第3日曜広場(お稽古事)、お見舞いがあります。皆様の高齢化に伴いお見舞いの回数が増えてきています。「いこいの場」の集まりにはドライブ出来る人との相乗りで来ていただいています、遠隔地区に住んでいて、参加したくても足のない人達も多々います。この方々に参加していただける方法がこれからの「いこいの場」の大きな課題です。

今般、日本ポストン会総会の席上で近況報告を申し上げたところ、思いがけず「いこいの場」支援のご芳志を戴き厚く御礼を申し上げます。

吉野静子

展覧会情報(続き)

展が、1997年4月から10月にかけて開催される。18世紀フランス絵画の名作日本初公開。東京都美術館。

美術WG 酒井典子 2/27/97

派遣教員ホームステイ受入報告 (1996年11月16~17日)

カレン ランガーズさん

3人の先生方は東京の代表的ベッドタウン、船橋、小金井、横浜に分かれてホームステイし、夕食はそれぞれの家の鍋物料理を楽しまれました。

わが家にはメドフォード小学校の先生 Karen Lundsgardsさんに来て戴きました。

靴をスリッパに履き替え、布団の敷き方、お風呂の使い方を説明しました。彼女はこたつと、トイレで手を洗う水がタンクに溜まり水洗用に使うことに特に興味をもたれました。

お鍋を囲みながら先生の日本での印象、我々のアメリカでの思い出、実際に経験した子供達は日米の教育の違いなどを一生懸命話しました。

翌日の朝、近所を散歩し、小学校や郊外の住宅地をみて、デパートで抹茶アイスクリームを作るための抹茶を買われました。久しぶりにアメリカの女性とおしゃべりし、英語のしゃべり方、ジョーク、褒め方、皮肉っぽい言い方などを思い出しました。

京都、広島を忙しく観光し、ホテルに泊まり、そんな中でのたった一泊のホームステイでしたが、大変喜んでもらえたと思っています。我々の日常生活をお見せするのが、一番の民間外交だと何故か今回つくづく感じました。我々をあんなに暖かく迎えてくれたボストンの人達、特に先生方にこれからもささやかなプレゼントが続くことを願っています。

(土居陽夫・嘉子)

マリー ウィリアムズさん

昨年11月、メドフォードの小学校の先生 Marie Williamsさんをお迎えしました。

いつもながら日本に招待される先生はハードスケジュールで見学旅行をされるので、ホームステイの一晚は、くつろいで普段の生活をお見せしました。

マリーさんはもちろん日本は初めて、見るもの聞くものの珍しさに興奮さみ。日本で何について感心したかの話題だけで、一晚あけそうでした。

事前に日本についての勉強をしていますが、実際に見るのとは大違いでしょう。最後にはさすがにマリーさんもうとうとし始めたので、終わりにし、翌日は、近くのスーパーマーケットでの日用品の買い物。東京郊外(小金井市)の平均的な日本人の生活を体験して貰いました。子供たちにこの体験を

ジム スミスさん

昨年11月にはじめてホームステイを受け入れました。それから今まで何度も手紙や電子メールのやり取りをしています。ジムさんのお嬢様のマリッサちゃんからも可愛い手紙を頂いて、家族ぐるみのお付き合いが続いています。この交流はきっと今後も永く続くと思っています。ジムさんからはアンティークのスプーンを送って頂き感激しています。今度ボストンに行く機会には是非またお会いしたいと思っています。

ジムさんはハーバード大学でも勉強された海洋生物学の権威で、ボストン地区のこの分野のリーダーです。今はローレンススクールの校長先生で、とても気楽で明るい人です。わが家訪問中は妻と3人でずっと笑っぱなしでした。

すき焼きの夕食の時に「日本の牛は毎日マッサージをし、ビールを飲ませ、モーツアルトを聞かせているから美味しいのだ。ベーターベンを聞かせては駄目なのだ」と言ったら、本気にしてそのまま帰国したのが心配です。

京成ばら園にご案内しましたが、秋のバラの真っ盛りで、大変感激しておられました。その帰り道、近隣の人達が総出でゴミ拾いをしているの見て感激していました。

さらに九段に送って行く時に駅で若者が道路にへばりついているガムを、しゃがんで削っているのを見てまた大感激していました。そして帰国してから、帰路立ち寄ったニューヨークの汚さと比較して、日本を天国の如くに賞賛する手紙を頂きました。少し良い所だけみていったのではと心配しています。

そこで私はアメリカの良さはニューヨークのように何でも吸収して、それをエネルギーにすることだと手紙に書いて送りました。

いずれにしても大変良い印象を持って帰国され、草の根の日米友好には大いに役立ったと信じています。是非皆さんも来年からホームステイを受け入れては如何ですか。勿論我々は何時でも受け入れる気持ちはです。(藤盛紀明・冨美子)

(マリー ウィリアムズさんの項... 続き)

分かち合うわ、と言って別れていった彼女の目の輝きが印象的でした。(近藤宣之・百合子)

ポーツマス条約に於ける小村寿太郎(その2)

ニューイングランドと日本の歴史の会WG

藤盛 紀明

3. 小村寿太郎とウイッテ

ポーツマス条約の日本側全権が小村寿太郎、ロシア側がウイッテであることは良く知られている。しかしこの二人の性格が随分と違っていたと言うことはあまり知られていない。今回はこの点について述べてみたい。なお(その1)で利用した資料以外からも情報を入手した。とくに松村正義氏の「日露戦争と金子堅太郎:新有堂」をかなり参考にした。

さて話題が少し変わるが、司馬遼太郎の作家としての原点は第2次世界大戦を自ら経験して、日本および日本人に大きな疑問を懐いた事にあると言われている。そして彼は明治の日本人はもっと素晴らしかったはずだと考え、それを検証していった。それが彼の一連の作品だとのことである。

彼の結論では日露戦争以降から日本はおかしくなって来たと言っている。私は日露戦争の講話条約に関するかなりの文献を読んでみて、特に気になったのは日本側全権大使の小村寿太郎の性格である。

小村寿太郎は大学南校(現在の東京大学法学部に相当)を卒業後、明治8年、文部省留学生としてハーバード大学の法律学校に入学した。大変な秀才で、頭脳は緻密、厳格な武士道精神を持った正義漢であったと言われている。ハーバード大学留学中も信じられないようなハードな勉学を行い、米国の有名な作家ホーウエルが、その著「ハーバード大学参観記」の中で「——端座して黙読する黒髪青顔の一少年あり。鷹揚閑雅、高士の風を帯ぶ」と記している。ハーバード大学には幾つかの図書館があるが、そのどこかに籠もって勉強したのであろう。

多くの明治の元勳には女性について大活躍が記録されているが、小村寿太郎は大変な酒豪ではあったが、大変な恐妻家でもあったと言われている。また父親の巨額な借金で年中借金取りに追いかけられていた。「彼は毎年毎年たった1枚しかない古外套の襟を取り換え地色の分からなくなったようなものを着ていた」と言われている。

ポーツマス条約の締結にあたっては、ハーバード時代のハードな勉学の成果を生かして、世界中の国際条約に精通し、理論的に相手を論破し、かつ日本

の要求を最後まで妥協せずに貫こうとしたと言われる。この点についてはいずれの文献でも確認されている。「もう少し妥協したら」と言う当時のルーズベルト米国大統領のアドバイスを無視して頑張ったので、条約は破棄寸前までいった。仲裁役のルーズベルト大統領は困って、日本政府と直接連絡をとり、小村を説得させて、条約締結に至ったと言われている。

条約交渉は秘密にすると両国の事前約束にも関わらず、ロシア全権のウイッテは逐次新聞記者に内容を漏らして、米国新聞を味方につけた。一方、小村は相手がどうであれ、約束は約束だとして、一切新聞記者に会わなかったために、大変不評で米国世論は次第にロシア側に傾いたと言われる。これについてもルーズベルトは「もう少し新聞記者に情報を流しては」とアドバイスしたが、小村は断ったと言われる。

この点について「There Are No Victors Here」では少し穏やかに表現しているが、松村氏の論文はかなり非難調である。

食事についてもウイッテは現地の食事はまずいといてニューヨークの一流ホテルのフランス人を雇ったが、小村は礼儀正しく、出された食事は一切残さず食べたと言われる。その結果胃腸を壊してニューヨークで入院し、日本帰国が延びてしまったと伝えられている。病名は腸チブスで、ポーツマスからボストンへの帰路、無蓋車に乗り、激しい雨に降られて更に容態が悪化したらしい。

さてポーツマス条約で日本は南満州鉄道の権利を獲得した。ところが米国の鉄道王ハリマンが資金援助するかわりにその経営権を獲得したいとして日本政府と交渉した。日本側としては井上薫等が賛成した。井上等の考えは「ロシアはまた南下政策をとり、何時戦争になるか分からない。日本にはもはや戦争する余裕がないので、アメリカを仲間にすれば、ロシアも攻めて来ないだろうし、いざ戦争になってもアメリカを頼りにする事が出来る。折角の権利であるが、将来のためには止む終えない」と言うもので

(次ページに続く)

(小村寿太郎とウイッテ 続き)

あった。

ところが帰国した小村寿太郎は「我々日本人が多数の犠牲者をだして獲得した権利を米国に譲り渡すのは反対である」としてこの話を無いものとしてしまった。当時、井上薫は財閥とグルになり、かつ女性関係の風聞も良くなかったために、彼の意見は取り上げられなかった。しかし日本の繁栄のためには井上が提唱し、育成した財閥が大きな貢献をしたことは事実である。

小村の反対でハリマンの要求が退けられて以後、日米関係は悪化の一途をたどり、第2時世界大戦へと突入して行った。従って小村寿太郎のこの決定が以後の日本の進路を決めたと思える。但し当時、米国には二大金融資本系列があり、ハリマン側と対抗するモルガン銀行系が、小村側を動かしてハリマン提案を却下した事は有名な日米外交史である。ポーツマス条約では日本側は当時のルーズベルト米国大統領に大変世話になった経緯があった。ルーズベルト大統領の従弟のモンゴメリー ルーズベルトがモルガン系の銀行家で、彼が金子堅太郎を通じて小村を動かしたのである。

人にはそれぞれの生き方がある。真面目一方の小村は儒教思想や武士道の色濃く残る当時の日本では高く評価されるものであった。

でもそれが日本を第2次世界大戦へ導いた一因とすれば、もう一度じっくり考えるに値すると判断している。

私は私の部下に、技術開発や商品開発をする人間は、井上薫やウイッテのような人材の方が望ましいと話している。

皆さんは小村寿太郎をどのように思われますか？

(この項終わり)

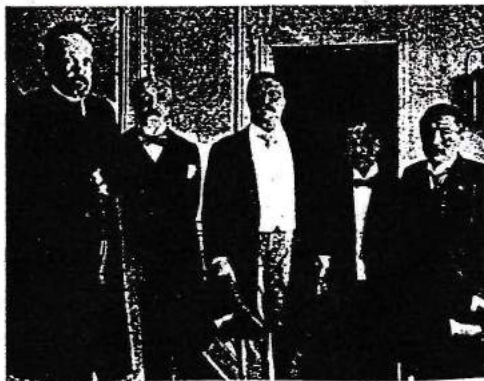


写真: ルーズベルト大統領(中央)と小村寿太郎(右)、ウイッテ(左)

1996年度日本協会セイヤー賞
ジョン コックス氏に贈られる

1996年度ボストン日本協会セイヤー賞の受賞者はジョン コックス氏に決まりました。同氏はメドフォード コミュニティー スクールに於けるボストン日本語学校のために、20年来変わらない理解と愛情を持ってお世話下さっている同市のコミュニティ教育の責任者です。

感謝祭も近い11月20日、マサチューセッツ州知事ウエルド夫妻、在米斉藤大使夫妻、河東(かわとう)新ボストン総領事夫妻等ご列席のもとに、授賞式そして夕食会が行われました。

セイヤー賞と申しますのは、亡夫ジョン セイヤーが日米親善、相互理解の向上に努めましたことから、90年に亡くなりました際、皆様からの尊いご芳志を基金にしてボストン日本協会に設けられた賞です。毎年、その年に特に日米関係に貢献のあった一個人、或いは一団体宛に贈られている賞で、去年でその五回目を記録致しました。

コックス先生は、子供の無い、従って日本語学校に縁の無かった私よりも、日本ボストン会の皆様の方が良くご存じかとも思いますが、遠く日本を離れボストンで、毎土曜日、日本語学校に通う子供達にとっては、正に「サンタクロース」のような優しいふくよかな方です。日本語学校の校長先生はじめ、PTA、更には日本人会や懇談会の皆様すべてから慕われておられる方です。

私は亡夫セイヤーの考え方や希望していた事をよく知っております。私は日本協会で役員をしており、セイヤー賞選考委員会の主席でもあります。コックス先生のような立派な方に賞を差し上げることができましたことについて、主人が大変喜んでいてであろうと自信をもって申し上げます。

同時に、コックス先生を推薦して下さった、日本人会会長石川定先生や前述のグループの方々に深く感謝している次第です。

セイヤー 桂子

1997年1月ボストンにて

日本ボストン会1996年度総会

日時: 1996年10月25日(金)午後6時

場所: NEC三田ハウス 芝クラブ

出席者: 井口代表幹事夫妻他41人

議事: 活動報告・会計報告・監査報告

藤崎博也新代表幹事挨拶(代読)

次期高木政晃代表幹事紹介

近藤宣之・當間きよみ・土居陽夫副代表
幹事紹介

講演: 1953ボストンマラソン優勝者山田敬蔵氏

歌と演奏: "秋の宵、Small Jazz Concert"

歌: 吉野美知子氏(パークレー音楽大学卒)

ギター: 山口友生氏(1959年東京生まれ)

会員紹介: Mr. Carl Kay(京都/Boston 協会理事)

英俊子氏(港区立教育センター研究相談員)

山下健一氏(北海道・MA協会)

参加者紹介: 吉野静子氏(ボストン日本人会)

募金: ボストン日本人会婦人部「いこいの場」

活動支援募金 (2万壱千円を寄付)

第4回総会は近藤副代表幹事の司会で開会。

まず、今年で任期が終了する井口武夫代表幹事から、ボストンとは1981年に総領事館開設以来ご縁があり、ボストン日本語学校への教員派遣を実現出来たのが最後の仕事になったと回顧。この間、各界の関係者にお世話になったが、この日本ボストン会にも幹事の方々からの要請を受け任期を勤めさせて戴いた。今後益々会員が増えることを希望し、一会員として楽しく過したい旨のご挨拶を戴きました。

藤盛副代表幹事の乾杯挨拶のあと、各WGの活動報告があり、会計報告・監査報告を承認後、学会出席のためソウル出張中の新代表幹事藤崎博也先生より、MIT(創立1861年)は日本からの留学生を1871年に受け入れたご縁があり、ボストンを第二の故郷と感じている一人として、会の成長を願っている旨のご挨拶(代読)を戴きました。

この後、高木副代表幹事を次期代表幹事、近藤・當間・土居副代表幹事及び新会員を紹介、総会を終了し、懇親会に移りました。

懇親会は1953年(昭和28年)ボストンマラソンにて優勝された山田敬蔵氏(昭和2年秋田県生まれ)のお話を伺うことで開会しました。

山田氏は69歳になる現在でも、一日30キロを

走るということで健康を保っておられます。総会の前日にトルコから帰国されたとのことでしたが、全然旅の疲労を感じさせない若さを保っておられました。

昭和28年3月にソ連スターリン首相の死亡、吉田首相のバカヤロー解散があり騒然とした時でした。

ボストンにはレース前、2週間程滞在する余裕のある日程でした。レースまでの間、毎日、昼食、夕食に招待を受けました。体調は非常によかったのですが、体に変調をきたす選手も出て、遂に一週間後に異議を申し立てる選手も出てきました。金栗先生からは「せっかく戦勝国の人たちがやってくれるんだ。こういう出会いを大切にすのもわれわれの使命なんだ」と教えられました。マラソンを通しての出会い、親善を大切にすることを強調され、このご縁が現在まで続いて来たことをお話戴きました。

ボストンには昨年・今年も含めて6回走ったが、来年も参加する意向を述べておられました。

今回日本ボストン会の会合に参加され、早速入会のお申し込みを戴きました。

当日参加された英俊子氏は、ご先祖の「英一蝶」の代表作「江戸月次風俗図」屏風六曲一双がボストン美術館に保存されている関係で、NHKの大河ドラマ「八代将軍吉宗」の放送特別記念作品としてこの原画が三分の一の縮尺で復刻された喜びを、屏風のポストブックに作られ残されました。当日参加の会員にはこのポストブックが配付されました。

札幌からは山下健一氏がご参加戴きました。1992年、ボストンで開催された北海道ウィークに合わせて、姉妹州の関係にあるマサチューセッツ州に横路知事を団長とする300人の代表団を送ったこととお話戴きました。北海道・マサチューセッツ協会のイベントには、日本ボストン会からも講師を紹介する形で提携しております。

吉野美知子氏(パークレー音楽大学卒)は山口友生氏のギター伴奏で「枯れ葉」をじっくりと歌って聞かして戴きました。

ボストンからご参加戴いた吉野静子氏からは、ボストン日本人会婦人部ボランティア活動としてのニューイングランド在住日系高齢者を支援する事業「いこいの場」のお話を伺いました。当日ご参加の会員にお諮りし、募金(2万壱千円)を募り、吉野静子氏にお持帰り願いました。(俣野善彦記)

幹事会記録

*1996年12月9日(火)出席者15人

総会結果反省事項

ボストン日本人会婦人部活動「いこいの場」支援

募金に対し礼状受領報告(別項参照)

音楽の会(10月24日於三井クラブ)報告

C&C Club主催マリブルネラのチェロコンサート

派遣教員受入報告(96年11月16/17日)(別項参照)

次回音楽会(6月)見送り

歴史の会(講師紹介:北海道・MA協会、2月)

藤盛紀明さん、「小村寿太郎について」

新会員入会状況(96年9月以降6人)

(建部佳世さん、野瀬芳宏さん、山田敬蔵さん、

英俊子さん、Carl Kayさん、田中豊一さん)

次回幹事会97年3月11日(火)午後6時半

幹事会記録

*1997年3月11日(火)、出席者 16人

北海道・MA協会宛講師(藤盛副代表幹事)紹介

報告を受けた(出席者100人以上)

歴史の会報告(別項参照)

岡倉天心の六角堂(北茨城五浦)(秋)

ハイキングの会(進展無し)

千鳥が淵お花見の会(4月4日予定)

テニスの会(進展無し)

会報第9号発行(3月31日予定)

Wentworth-by-the-Sea Hotel復旧プラン報告

新会員入会状況(96年12月以降3人)

松井道彦さん、村上真美さん、小松民男さん

郵便振替票申請(手続中)

次回幹事会6月10日(火)午後6時半

総会開催候補日:10月30日(木)

又は10月24日(金)

「歴史を飲もう会」報告

金子佳生

岡倉天心を探る

昨年11月16日(土)、天気は風の強い晴天。地下鉄千代田線千駄木駅10時集合。団子坂下、谷中三崎坂を上がり、途中おせんべい屋に立ち寄りお土産を買い、天心記念公園および近隣の古い寺で、鈴木春信、下村観山、高岡鉄舟等の墓を訪ねました。

天心記念公園自体は小さな町のどこにでもある公園ですが、記念の六角堂などがあり、付近は江戸時代からの寺町で、今もその頃の雰囲気そのまま残された趣のある街並でした。

最後は上野駅近くの東天紅で、バイキングの中華料理で歴史に乾杯。参加者9人。

エドワード・モースを探る

3月16日(日)天気は生憎の小雨。午後零時半、JR大森駅に集合。大森貝塚から品川歴史館(モース関連展示品)を見学。あと大田区郷土博物館会議室にてMr. Peter Fetchko(前Peabody Museum館長)から「エドワード・モース」についての講話を伺った。

Mr. Petchko は1992年にPeabody MuseumがEssex Museumと合併後、Peabody Essex MuseumのDirector of Curatorial Operations。同氏は大田区の文化交流の一環として昨秋招待され、5月まで夫妻で滞在。

この後、多摩川台公園内の亀甲山古墳と資料館を訪ねた。最後は関さん宅を訪問し乾杯。参加者10人。

ボストンへようこそ(改定版)

(Welcome to Boston)

頒布価格一部 2500円(送料込)

申込先

ボストン ガイド ブック

第4回ゴルフ大会のご案内

日時: 1997年6月4日(水)午前8:00集合

場所: 日本カントリークラブ

〒350-04 埼玉県入間郡越生町大字大谷138

☎ 0492-92-3331

参加費用: 5,000円(賞品+パーティ代)

プレー費用: 21,000円+食事代(個人精算)

参加人員: 4組16人(先着順)

申込締切: 5月9日(金)

申込先: 伊藤英徳、又は日本ボストン会幹事迄

*伊藤英徳 ☎

Fax

*日本ボストン会 ☎

Fax

コース案内・地図: 申込者に後日送付